

第5回 公開対談「本願寺茶房」  
「儀礼を語る ―儀礼空間の『音』の力―」（要約）

対談 亭主：天岸淨圓師 客人：小野 真師

宗教儀礼の定義は、宗教学者の数だけあるといわれるが、今回は最大公約数的に「聖なるものに関わる際の行為形態」と定義し話がすすめられる。「聖なるもの」とは、一神教における造物主（神）・彼造物（人間）という二項対立の世界観が前提となる、神の在り方を示す言葉である。

天岸氏は、「聖なるもの」との関わりはどう経験されるかと小野氏に問い、小野氏は、ルドルフ・オットー（1869-1937）における感情・情緒面からの経験、ミルチャ・エリアーデ（1907-1986）における具体的な客観的事物による経験について触れ、儀礼の根底に「聖なるもの」との出会いがあると答える。

そこで小野氏は、一神教色の強い「聖なるもの」という西洋的概念をどう日本的・仏教的概念へと翻訳するかが問題になると指摘する。そしてまず注意を払うべき事柄として、一神教では神との断絶が人間の基礎となるのに対し、仏教では仏と人間の繋がりが基礎となっていることをあげる。また、「聖なるもの」を翻訳する場合に、一神教では「神秘」を用いるが、仏教では「不可思議」に相当するだろうと、その感覚の違いを指摘する。天岸氏は、「聖なるもの」への感覚の違いは、儀礼の在り方に影響を及ぼすかと問い、小野氏は影響を及ぼすと答える。音楽は、西洋では神と人間の断絶を補い、人間の理性にはたらきかけるものとして儀礼の上に重要な役割を果してきたが、東洋では身体的であるとされ、味わいや情緒を重視しながら儀礼に用いられてきたと、東西での儀礼における音楽の位置づけの相違について言及する。

天岸氏は、仏教ではどうかと問う。小野氏は、仏教は音楽をアンビバレントなものとして受容していると答える。仏教は音楽の機能面を肯定し芸術面を警戒するとし、とくに大乘仏教以降、供養や浄土など宗教的イメージの伝達媒介として用いられたと指摘する。また、日本仏教は独特な捉え方をすると答え、日本には、音楽を聴くことが修行になるという、音のなかに仏法を聞く、音を聴くことで往生が定まるという思想があったことを指摘する。そこで天岸氏は、現代における音楽観と随分違うと指摘し、小野氏は、「聖なるもの」が見えにくくなっているのが現代であると答え、いま一度、音楽の意味や役割を宗教的視点から見直すべきであると指摘する。

二人はここで、現代における「聖なるもの」の実感として、音はどういったはたらきをするのかという問題意識のもと、浄土真宗本願寺派『宗祖讃仰作法 第三種』の動画を紹介する。天岸氏は、伝統を重視する教団が、こうした新しい作法の形式を伝統的作法と同等に扱うのはめずらしいことであると評価する。小野氏は、この「第三種」の作法を今後の真宗儀礼における音楽を考える上でさまざまな示唆を与えてくれると述べる。西洋の合理的音楽の極限ともいえる電子楽器と日本古来の雅楽器の融合がはかられていること、また、電子楽器を用いながらも日本古来の法要形式の枠組みが守られていることなどをあげ、浄土真宗における「聖なるもの」との出会いが見事に表現されていると評価する。